

# 土曜 ライフ・楽しむ

## 「コロナ離婚」吹き飛ばす1冊



生活情報誌「悠悠と」  
編集長・真鍋康利さん



外出自粛、この状態はいつまで続くのでしょうか。「葉ごもり特需」といいますか、一部の商品やサービスが好調で、書籍も含まれているようです。こんな時こそ「積読(つんどく)」「状態の本を引っ張り出すだけでなく、新たに求める人も多いようです。ネット通販があるとはいえ、大都市圏では書店の多くは休業が続く、出版社の苦しさは相変わらずといます。

そんな中、「コロナ離婚」なる嫌な言葉が聞こえてきます。夫婦が自宅で過ごす時間が増えたことでストレスがたまり、隠れていたあつれきが表面化したことが原因の一つだそうです。お互いがうまく自分の領域、時間を守れたらそうはならなかったかもしれない、とても残念です。



そんな危機的状況にある方にも、そうでない方にも役立つ1冊の本を紹介いたします。2019年10月31日付の本紙朝刊道内面「BOOKほっかいどい」にも載った「瑠美子、君がいたから」二人で歩んだ人生ノート(高井保秀著、亜璃西社)です。

著者の妻は肺腺がんが脳へ転移し、がん性髄膜炎と診断され、4年半に及ぶ闘病生活を送った後、一昨年3月に亡くなりました。その間、2人は「できることはなんでもしよう」と免疫力を高めると聞

かされたあらゆる方法を試します。最後の緩和ケア病棟での233日間の入院生活では、彼も病室に泊まり込み看病のサポートに徹しました。

発病を知らされた時、この病の情報は少なく、どう進行するかなど全く分からないまま、手探りの看病を続けました。懸命に命の炎をともし続ける妻の姿から、自分に何かさせようとしているのでは、と感じたそうです。「症状の進行を記録することがきつと誰かの役に立つはず、闘病記を書くことが私の使命と思った」と彼。医療や看護、介護の実際に加え、「命の尊さ」

「夫婦の在り方」が満ちあふれています。若い人たちにも知ってほしいと、電子書籍も用意されています。  
読者から「看護学生に読ませたい」「自分と重ねて読んだ。改めて妻に感謝する」とも言葉で伝える大切さを気付かせてもらった」といった感想が届いているそうです。



この本は本紙のほか、「産経新聞」「東京新聞」「千葉日報」でも紹介されました。彼によると、取材をしてくれたのは4人とも壮年の男性記者で、「ご自身の立ち位置や夫婦関係などを見つめ直し、共感してくださったのかも知れない」とのことです。  
こんな時期だからこそ、ぜひご家族でお読みください。「コロナ離婚」など吹っ飛びます。